

医見拝聴

ほしいのは「安心」

時事通信社千葉支局 鈴木 隆義

目に入るものすべてが茶色がかつた古ぼけた診察室で、老先生は、6歳と4歳の娘の鼻に手際よく器具を差し込み、じいっと覗き込む。そして、くもると私の方を向いて、「大丈夫でしょう。様子見ましようよ」と笑顔を見せる。毎週のように、近所の耳鼻咽喉科医院で繰り返される「儀式」である。

2人の娘は鼻が弱いらしく、夜、眠っている時、鼻水が喉に降りてきて咳き込むことが多い。ヨメさんは、それが心配で心配で仕方ない。私にしてみれば、ぜんそくと診断されているわけでもなく、子供が鼻水を垂らすなど、昔は珍しいことではなかったはずで、なにぶんヨメさんの心配性が度を過ぎていただけだと感じている。

しかし、ひどく咳き込んだ日の翌朝や、私の仕事のない土曜日、「ねえ、きょう、子供、連れて行ってくれないかな」と、不安げに言われると、やはり仕方がないのがある。

「いやあ、大したことないとは思っていますが、ヨメさんが……」。子供を連れて医院へ出掛け、老先生と顔を合わせても、なんとハジの悪いこと。ただ、老先生も分かったもので、「はいはい」とさっすく診察を始める。

「早く帰って遊びたい」と騒ぐ上の娘。「きょうのお天気は……」という老先生の問いに、晴れているのに「雨……」と元氣いっぴきに答える下の娘。「ううなると、本当になにをしに来てるのだろう、という感じで、恐縮の極みなのだが、老先生も楽しそうだし、いいのかな、という気分させてくれる。そんな老先生である。」

この「儀式」、なにをしているのかといえば、診察を受け、治療を施されてはいるが、むしろ老先生から「安心」をいただきたいに参上しているといつべきなのだろう。医院から子供をアパートに連れ帰り、「きょうも大丈夫だつてさ」というと、ヨメさんは実にホッとした表情を浮かべる。

患者や家族に「安心」を施すことが、医療の原点と思わせられる瞬間である。もちろん、ヨメさんが老先生に「安心」を抱いているのは、彼女が急性副鼻腔炎を患った時、対応が的確だったことも大きいのであるが。

いずれにしても、「安心」が医療の原点という思いにとらわれるのは、先生方から「安心」を得ることが、いかに難しいかという現状がある。清潔で明るい待合室や診療室を備えながら、患者の話を聞かず一方的にまくし立てる先生。検査を重ね、慎重に投薬する姿勢は分かるものの、患者の眼を見て話さない先生。語り口は優しいけれど、次から次へと機械的にさばっているという感覚が拭えない先生。

なにぶん先生と患者の「相性」というところは大きいたろうし、生半可な医療知識で診療の手法を、素人が判断するなど叱られそうでもある。ただ、「安心」を得たいがために、たくさん患者たちが右往左往し、さまよっていることも事実。せん越ながら、先生方には、いかに患者に「安心」を施していくか、医療知識・技術を存分に生かすためにも、ぜひ、「考えていただきたい」ところである。

千葉県医師会健康宣言

みんなで高めるいのちの価値

千葉県医師会は、こんな活動を推進しています。

地域連携

地域に開かれた医師会として、患者さんの団体やボランティア団体、行政との連携をさらに深めます。

情報公開

患者さんと医師との一体感を強める情報開示につとめ、IT時代にふさわしい医師会をめざします。

新世紀の医療へ

高齢化社会に対応した新しい健康価値観の創出、環境や生態系との関わりを考慮した医療を追求します。